

## 26. 興道寺廃寺

所在地：三方郡美浜町興道寺小字観音・淵ノ上  
調査原因：内容確認（興道寺廃寺第12次調査）  
調査期間：平成22年5月17日～9月30日  
調査主体：美浜町教育委員会  
調査面積：191.7 m<sup>2</sup>  
時代：古墳時代後期～古代



位置図（S=1/50,000）

**調査の概要** 今回の調査は、これまでの調査で明らかとなった事柄を再度確認する、あるいはこれまでの調査を補足することを目的として、調査面積を絞って実施しました。

**遺構** 今回の調査で明らかとなった主な成果は以下のとおりです。

①**金堂基壇** これまでの調査で創建、再建という2つの時期の金堂の基壇（土壇状の基礎部分）が南北に重複して所在する様子が確認されていましたが、今回の調査では再建期の金堂基壇の北面階段の部分を再調査しました。階段は基壇の北の縁辺の中央部に位置し、縁辺の石積みから張り出して造られます。階段の1段目の踏み面が比較的、元もとの姿を残しており、人頭大の自然礫の平坦面を上に向けて敷き並べて踏み面としています。この階段の平面規模は、階段の出が約1.6m、階段の幅2.4mに復元されます。

②**講堂基壇** これまでの調査で講堂基壇の東西の縁辺が見つかっていましたが、今回の調査で新たに南北の縁辺を確認しました。講堂基壇の四辺を確認したこととなり、東西16.5m、南北12.3m前後の平面規模に復元されます。この基壇は真北から10度西偏しますが、基壇の方位や縁辺の石積みの有無など再建期の金堂・中門基壇の造り方とは大きく異なり、むしろ再建期の塔基壇と共通した基壇の造り方をしています。講堂の時期ははっきりしませんが、再建期の金堂（8世紀後半）以後の時期と考えられます。

③**南門基壇** これまでの調査で南門基壇の北の縁辺と北西隅が見つかっていましたが、今回の調査で新たに基壇の西の縁辺を確認しました。基壇の縁辺は石積みで、人頭大の自然石を数段に積んでいます。この再建期の南門基壇の平面規模は、東西約7.5m、南北約4.8mに復元されます。なお、南門基壇の周辺には再建期の整地層が広く分布しています。

④**寺域北限** 中心伽藍（寺院の中心部）の北側には複数の時期の掘立柱建物群が重複して展開する区域があり、さらにその北側には竪穴建物・掘立柱建物が混在して展開する区域があることがこれまでの調査で確認されていますが、現在の地表面の微地形を観察すると、この両エリアの境界付近には標高差があり、またこの付近の調査地からは一定量の瓦片が出土することも明らかとなっていました。この地点のすぐ南側で8世紀前半の土器が出土する、幅1.4mほどの東西に延びると思われる溝状の遺構が見つかっていましたが、今回の調査で

はこの溝状の遺構が東に向けて延びることが確認されました。この東西溝の幅は約 1.5m、確認した長さは約 8 m、深さ 0.2~0.3mです。この溝は再建期の金堂基壇の東西方位とおおむね合います。また、溝の位置は寺域北限付近にあり、寺院外郭施設の一部を構成する可能性も考えられます。

**遺物** 遺物の大半はこれまでの調査と同様に瓦です。今回の調査でも砲弾形の塑像螺髪 1 点が再建期の金堂基壇の北側から出土しています。

**まとめ** 今回の調査は、昨年度までの興道寺廃寺の調査内容を補足するという地味な調査に終始することとなりましたが、寺院再建期に複数の時期がある可能性も浮上するなど、新たな成果も得られました。平成 23 年度においても同様に補足的な調査を実施することで、興道寺廃寺という古代寺院の往時の姿をより明らかとし、平成 23 年度に予定している発掘調査報告書作成の一助としたいと思います。なお、興道寺廃寺に関する調査の最新成果の一部は平成 23 年 3 月に刊行された美浜町歴史シンポジウム記録集 5 『ここまで分かった！興道寺廃寺』に収録されていますので、あわせて御高覧いただければ幸いです。（松葉竜司）



写真 1 再建期金堂基壇北面階段



写真 2 再建期南門基壇西辺

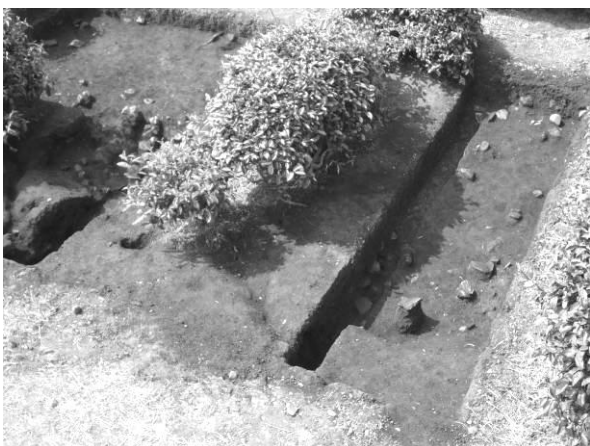


写真 3 講堂基壇北辺



写真 4 寺域北限東西溝